

研究活動

奥山直司

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数
(著書) 1. 梵語仏典の研究 密教経 典篇	共著	1989. 2	平楽寺書店	本書は梵語仏典研究のビブリオグラ フィの密教経典篇である。奥山の執筆 箇所は次の通り。序論Ⅱ 本書におけ る経典分類法、第1章 所作類、第3章 無上瑜伽類、第4章 雑、附篇Ⅱ、Ⅲ	塚本啓祥・松 長有慶・磯田 照文・桜井宗 信・川嶋健	569頁中 406頁
2. 東北大学西蔵学術登山隊 人文班報告 チベット・曼 荼羅の世界—その芸術・宗 教・生活—	共著	1989. 3	小学館	1986年に東北大学西蔵学術登山隊人文 班員として参加した際の知見を基に 「化身の王権」においてダライ・ラマ の本質をポタラ宮との関係において論 じ、「イコンの園へ」でチベット最大の 仏塔パンコル・チョルテンの構造と シンボリズムを解説した。	編者：色川大 吉、分担執筆 者：色川大 吉、山折哲 雄、柴崎徹、 奥山直司、河 野亮仙人、岩 分担執筆：中村 元、松長有慶、 奈良康明、山口 瑞鳳、宮地昭、 山折哲雄、奥山 直司	168頁中95頁
3. 釈尊絵伝	共著	1996. 4 (平成8 年4月)	学習研究社	多田等観がチベットから請来した仏伝 図タンカ・セツの特徴を分析し、詳 細に解説する。精密な大型複製版付 き。2冊組セットで、「釈尊絵伝〔図 解〕」(127頁)は奥山がすべて執 筆。「釈尊絵伝〔解説〕」の奥山執筆 部分はpp. 62-87。		214頁中 153頁
4. チベット [マンダラの世界]	共著	1996. 6 (平成8 年6月)	小学館	チベットの歴史・宗教・文化を「チ ベットの自然と人間」「ダライ・ラマ とは何か」「チベット密教」「チベッ ト興亡史」などの諸項目に分けて解説 する。本人の文章に共著者松本栄一の 写真とのコラボレーション。	松本栄一、奥 山直司、ルン トック	2-113頁
5. ムスタン 曼荼羅の旅	共著	2001. 2 (平成13 年2月)	中央公論新社	ヒマラヤ最後の秘境と言われるムスタ ンに残るチベット仏教の文化遺産に関 する調査報告とヒマラヤ仏教紀行。共 著者松井亮が提供し、奥山がすべての 文章と写真キャプションを執筆した。	奥山直司、松 本亮	256頁
6. 評伝 河口慧海	単著	2003. 8 (平成15 年8月)	中央公論新社	明治の探検僧河口慧海の思想と行動を 生涯にわたって実証的に解明した評 伝。		400頁
7. 河口慧海日記 ヒマラ ヤ・チベットの旅	編著	2007. 5 (平成19 年5月)	講談社	2004年に発見された河口慧海の第1回 チベット旅行中の日記を校訂し注を付 して全文掲載する(第1部)。これに 「日記に基づくヒマラヤ・チベットの 旅」「河口慧海の人と業績」「伯父河 口慧海の想い出」の3編の解説を付す (第2部)。奥山は全体の編集と第1部 と第2部の「日記に基づくヒマラヤ・ チベットの旅」を担当した。	奥山直司、高 山龍三、宮田 恵美	314頁
8. 評伝 河口慧海	単著	2009. 11 (平成 21年11月)	中央公論新社	同名の単行本6に加筆訂正を加えた上 で文庫化した。		533頁
9. 高山寺蔵 南方熊楠書翰 一土宜法龍宛 1893-1922	共編 著	2010. 3 (平成22 年3月)	藤原書店	高山寺蔵の南方熊楠書翰の校訂テキス トに詳細な注、解説、年譜等を付した もの。	雲藤等、神田 英昭	370頁
10. 宗教の事典	共編 著	2012. 10 (平成 24年10月)	朝倉書店	本書は総合的な宗教事典である。奥山 は、編集の他、「世界の宗教潮流」の 「仏教」の項、「世界宗教の現在」の 「チベット・モンゴルの宗教」、「カ リスマ・聖人列伝」の「仏教系」を執 筆した。	監修：山折哲 雄、編集：川 村邦光、市川 裕、大塚和 夫、奥山直 司、山中弘	919頁
11. コンタクト・ゾーンの人 文学4 Postcolonial/ポス トコロニアル (翻訳・解説)	共編 著	2013. 3 (平成25 年3月)	晃洋書房	複数文化の接触領域、またはコンタク ト・ゾーンを共通テーマとした論文集 の4冊目。	編者：田中雅 一、奥山直司	285頁
1. D. スネルグローヴ/H. リ チャードソン『チベット文 化史』 (学術論文)	単著	1998. 4 (平成10 年4月)	春秋社	原著はチベット文化に関する世界的な名著 である。これを和訳し、詳細な訳注と解説 を加えた。		478頁
1. Guhyasamājantra のチ ベット語訳敦煌写本	単著	1979. 12 (昭和54 年12月)	『東北印度学宗教学 会論集』6	Guhyasamājantraのチベット語訳 敦煌写 本の存在を指摘し、その特色について考 察する。		3頁
2. Guhyasamājantra 研究お ぼえ書	単著	1982. 3 (昭和57 年3月)	『印度学仏教学研究』30-2	Guhyasamājantraの梵文写本の系統を 明らかにした。		2頁

3. Jyotirmañjarīのサンスクリット写本	単著	1982. 12 (昭和57年12月)	『東北印度学宗教学会論集』9	Abhayākara Gupta の護摩儀軌Jyotirmañjarīの梵文写本の発見報告。	2頁
4. Abhayākara Gupta の護摩儀軌Jyotirmañjarī	単著	1983. 3 (昭和58年3月)	『印度学仏教学研究』31-2	Jyotirmañjarīの内容を分析し、その特色を	2頁
5. Jyotirmañjarīの研究 (I)	単著	1983. 9 (昭和58年9月)	『文化』47-1/2	Jyotirmañjarīの梵文テキストの前半部分を校訂出版した。	3頁
6. Abhayākara Gupta の護摩修法	単著	1984. 3 (昭和59年3月)	『印度学仏教学研究』32-2	Jyotirmañjarīの護摩儀軌の内容を分析し、その特色を明らかにした。	3頁
7. タントラ仏教における女神崇拜について	単著	1986. 3 (昭和61年3月)	『東北印度学宗教学会論集』12	Vajravāhī関係の成就法に基づいてインド密教における女神崇拜を考察。	3頁
8. Jyotirmañjarīの研究 (II)	単著	1986. 12 (昭和61年12月)	『東北印度学宗教学会論集』13	(I)に引き続いて梵文テキストを刊行。	18頁
9. 『河口コレクション』の資料的価値	単著	1986. 12 (昭和61年12月)	『東北大学文学部所蔵河口慧海請来チベット資料図録』校成出版社	東北大学大学院文学研究科に蔵される「河口コレクション」の今日における資料価値を論じる。	6頁
10. 万神の集い—パンコル=チョルテンに関する調査報告—	単著	1987. 3	『日本西蔵学会会報』33	中央チベット・ギャンツェにある大仏塔パンコル・チョルテンに関する実地調査報告。	6頁
11. チベット仏教パンテオン形成に関する二つの課題	単著	1988. 3 (昭和63年3月)	『印度学仏教学研究』	チベット仏教のパンテオンの形成過程を2方面から考察する。	7頁
12. 慧海の手紙—河口慧海と19世紀末の日本そしてアジア—	単著	1989. 6 (平成元年6月)	『シンポジウム・ネパール』15	河口慧海がダライ・ラマに宛てて書いた手紙の内容分析から慧海の入蔵目的と明治仏教界との関連を考察する。	9頁
13. 多田等観請来仏伝図タンカについて	単著	1991. 11 (平成3年11月)	『密教図像』10	多田等観が請来した仏伝図タンカ・セットの内容とその典拠を明らかにした。	16頁
14. ある聖者の伝説—アドヴァジュラ伝《Amanasikāre Yathāśrutakrama》にみられる修行者像—	単著	1991. 12 (平成3年12月)	東北大学印度学講座六十五周年記念論集『インド思想における人間観』	インド後期密教の担い手である成就者の人間像を探るために、梵語で書かれたアドヴァヤヴァジュラ伝を翻訳・分析した。	23頁
15. 魔神信仰—チベットにおける「神仏習合」の一断面	単著	1991. 12 (平成3年12月)	立川武蔵編『講座仏教の受容と変容3 チベット・ネパール編』校成出版社	チベット仏教における魔神崇拜を文献研究と現地調査の両面から論じた。	25頁
16. インド後期密教における教理と造形—devataとそのアイコンをめぐる—	単著	1992. 5 (平成4年5月)	『日本仏教学会年報』57巻	成就法の基本構造を明らかにし、そこにおけるアイコン (図像) の機能を分析した。	14頁
17. On the Basic Structure of the Potala Palace	単著	1992. 8 (平成4年8月)	TIBETAN STUDIES, Proceedings of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies, NARITA 1989. Vol. 2. Naritasan Shinshoji	ラサのダライ・ラマの宮殿ポタラ宮の構造を説明するとともに、それに象徴されるダライ・ラマの王権の特質について考察した。	8頁
18. ラサのコスモロジー—ヒマラヤ周辺地域の都市に関する研究 (1)	単著	1993. 3 (平成5年3月)	塚本啓祥博士還暦記念論文集『智の邂逅—仏教と科学』	ラサの旧観を復元し、これをマンダラ都市として位置づける。	12頁
19. インド後期密教における自己神化論—アバヤーカラグプタ著『自身加持次第のウパデーシャ』—	単著	1993. 7 (平成5年7月)	宮坂宥勝博士古稀記	アバヤーカラグプタの『自身加持次第のウパデーシャ』の校訂・翻訳を通じてインド後期密教における自身加持の行法を解明する。	18頁
20. 仏と神のパンテオン	単著	1994. 1 (平成6年1月)	季刊『仏教』26	チベットにおける神仏関係論的考察。	10頁

21. 敦煌莫高窟 第465窟の壁画について(I)	単著	1994. 12 (平成6年12月)	『密教図像』13	敦煌莫高窟第465窟の密教壁画の解説。	9頁
22. 同 (II)	単著	1995. 3 (平成7年3月)	『密教学研究』27	敦煌莫高窟第465窟の密教壁画の解説の続き	13頁
23. 河口慧海の思想	単著	1995. 3 (平成7年3月)	『印度学仏教学研究』43-2	河口慧海が至りついたウパーサカ仏教の思想を彼の著『在家仏教』から明らかにする。	5頁
24. ラサーマンダラ都市	単著	1996. 9 (平成8年9月)	立川武蔵編『マンダラ宇宙論』法蔵館	マンダラ都市としてのラサの構造に再考を加える。	24頁
25. 「釈尊絵伝」絵引索引(1)	単著	1996. 9 (平成8年9月)	『高野山大学創立百周年記念 高野山大学論文集』	多田等観請来の仏伝図を資料として絵引索引を作成した。	14頁
26. 同 (2)	単著	1997. 1 (平成9年1月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』第10	同上	14頁
27. 初期密教經典の成立に関する一考察	単著	1998. 3 (平成10年3月)	『平成7～9年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 大乘における密教の形成過程の研究』(研究代表者松長有慶)	「パンチャラクシャー」所属の經典である『マハーマントラーヌサーリニー』の成立と展開をスキリングの所論を踏まえつつ跡付け、もって初期密教成立の一端を考察した。	14頁
28. Sādhanaśataka について	単著	1998. 3 (平成10年3月)	『印度学仏教学研究』46-2	『成就法の花環』が『百成就法集』を改訂増補してものであることを明らかにし、改訂者としてアバヤーカラグプタを特定した。	6頁
29. インド密教ホーマ儀礼	単著	1999. 5 (平成11年5月)	立川武蔵・頼富本宏編『中国密教』(シリーズ密教3) 春秋社	インド密教のホーマ儀礼の構造をJyotirmañjarīを資料として明らかにするとともに、インド密教のホーマ儀礼の発達過程を考察する。	19頁
30. 明治二十年代後半の黄檗宗と河口慧海—『明教新誌』の記事を中心に—	単著	1999. 7 (平成11年7月)	『井上円了センター年報』8	河口慧海が明治二十年代後半に発生した黄檗宗の内紛にいかに関わったかを『明教新誌』を主たる資料として解明した。	pp. 101-127
31. 敦煌の密教美術	単著	1999. 11 (平成11年11月)	立川武蔵・頼富本宏編『中国密教』(シリーズ密教3) 春秋社	敦煌地方における密教美術の展開を通史的に明らかにした。	13頁
32. 慧海仏教学の成立	単著	1999. 12 (平成11年12月)	『河口慧海著作集』第4巻、うしお書店	河口慧海の晩年の仏教思想を『在家仏教』と『正真仏教』から明らかにする。	22頁
33. 埋蔵と化身—インド後期密教の形成と展開に関する一考察—	単著	2000. 1 (平成12年1月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』別冊第2	Vajrabhairava-tantraのテキスト解説に基づき、インド後期密教における埋蔵經典的発想と化身思想について考察を加える。	17頁
34. 河口慧海の思想遍歴	単著	2000. 2 (平成12年2月)	『河口慧海著作集』第3巻、うしお書店	青年時代の河口慧海の思想遍歴を堺時代から東京時代にたどる。	20頁
35. 関于多田等観携帰仏伝図	単著	2000. 6 (平成12年12月)	『1994年敦煌学国際学術検討会』	多田等観請来の仏伝図に関する考察(中国語)	
36. 明治二十年代前半の仏教運動と河口慧海—『溯源教会雑誌』と『尊皇奉仏大同団報』の記事を中心に—	単著	2000. 12 (平成12年12月)	高木神元博士古希記念論集『仏教文化の諸相』山喜房仏書林	明治二十年代前半の仏教運動に河口慧海がどう関与したかを諸資料に跡付ける。	17頁
37. 土宜法龍とチベット	単著	2001. 3 (平成13年3月)	『南方熊楠研究』第3号	真言宗の土宜法龍がチベットに興味を抱いていた理由と世界一周旅行におけるチベット情報の収集を論ずる。	14頁
38. 慧海の手紙	単著	2001. 7 (平成13年7月)	『河口慧海著作集』別巻2、うしお書店	河口慧海がドラマに宛てて書いた手紙の意味づけを再考する。	7頁
39. 明治の仏教僧によるアジア留学及び探検の研究	単著	2002. 3 (平成14年3月)	『平成12年度～13年度科学研究費補助金研究成果報告書』	明治時代にアジア各地に留学・探検に行った日本僧たちの事績を掘り起こし、その思想史的・文化史的意義を考察する。	54頁
40. 日本近代仏教史の一側面—明治の印度留学生を中心に—	単著	2003. 3 (平成15年3月)	『印度学宗教学研究』30	日本近代仏教学の形成と近代の仏教運動との関係を大乘非仏説論対策などの観点から考察する。	14頁

41. 十八会指帰校注	単著	2004.3(平成16年3月)	『新国訳大蔵経密教部4 金剛頂経・理趣経』大蔵出版	中国・日本密教の基本典籍の一つである『十八会指帰』の国訳(書き下し)と注記・解説	pp.135-151
42. ランカーの八僧—明治二十年代前半の印度留学生の事績—	単著	2004.6(平成16年6月)	『仏教文化学会創立10周年・北條賢三博士古稀記念論文集 インド学諸思想とその周延』山喜房仏書林	明治20年代にスリランカに留学した日本僧たちの事績を探究し、その仏教史的な意義を考察する。	18頁
43. Meditation and Visual Arts in Mantra Mahayana Buddhism	単著	2004.1(平成16年1月)	Matrices and Weavings: Expressions of Shingon Buddhism in Japanese Culture and Society, Koyasan University	日本密教の諸尊法とインド密教の成就法を比較しながら密教の修法と美術の関係に考察を加える。	18頁
44. 土宜法龍と南方熊楠	単著	2005.12(平成17年12月)	松居竜五・岩崎仁編『南方熊楠の森』方丈堂出版	真言僧土宜法龍の経歴を明らかにした上で、新出資料に基づいてロンドンにおける両者の交流の始まり前後の事情を明らかにする。	17頁
45. 呪殺の冥王たち—『ヤマーリ・タントラ』と『ヴァジュラバイラヴァ・タントラ』—	単著	2005.11(平成17年11月)	松長有慶編『インド後期密教 [上]』春秋社	『ヤマーリ・タントラ』『ヴァジュラバイラヴァ・タントラ』とその関連文献の解説	24頁
46. 成就法の花環—『サーダナ・マラー』—	単著	2005.11(平成17年11月)	同上	『サーダナ・マラー』とその関連文献の解説	26頁
47. 仏の髑髏が経を吐く—『マハーマーヤー・タントラ』『ブッダカパーラ・タントラ』—	単著	2006.1(平成18年1月)	松長有慶編『インド後期密教 [下]』春秋社	『ブッダカパーラ・タントラ』とその関連文献	7頁
48. 男神の形をした女神—『マハーマーヤー・タントラ』—	単著	2006.1(平成18年1月)	同上	『マハーマーヤー・タントラ』とその関連文献の解説	8頁
49. 弘法大師空海論を読む	単著	2006.12(平成18年12月)	高野山大学叢書第5巻 現代に生きる空海』高野山大学選書刊行会	弘法大師の人間像を探究するために5つのフィクションを取り上げ分析する。	18頁
50. 文成公主ロードを行く—青海の寺院と遺跡	単著	2007.3(平成19年3月)	『平成15—18年度文部化学賞科学研究費補助金基盤研究(B)・国際学術調査・研究成果報告書 西蔵自治区—青海省を結ぶ蔵族の工芸美術と芸能の文化 その資料と保存に関する研究』	青海省の寺院と遺跡に関する調査報告、特に玉樹研ラッコ谷の遺物についての調査報告。	17頁
51. Pilgrimage to the Cryst-tal Mountain in Dolpo by Japanese Monk, Kawaguchi Ekai	単著	2008.3(平成20年3月)	Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversity, Proceed-ings of the Inter-national Conference on Esoteric Buddhist Studies, Koyasan University, 5 Sept.-8 Sept. 2006	日記に基づく河口慧海のトルボ通過の足跡と慧海日記が伝える19世紀末のトルボ・西チベットの情報の分析。	16頁
52. 『センション年代記』によるセンション村(吾屯)の起源	単著	2008.3(平成20年3月)	『平成16年—19年度文部化学賞科学研究費補助金基盤研究(C2)・研究成果報告書 チベット仏画制作センターにおける伝統技法用法と継承に関する研究』	レブコン(青海省黄南蔵族自治州同仁県)のセンション村の歴史についての住民の自己主張を文献と寺院壁画を併用して解明し、その意味するところを明らかにする。	14頁
53. ゴマル寺の壁画	単著	2008.3(平成20年3月)	同上	レブコンのゴマル寺に残る古い壁画の分析	7頁
54. カサル村のタンカ	単著	2008.3(平成20年3月)	同上	レブコンのカサル村に残るタンカの調査報告	6頁
55. 近代日本仏教史の中の土宜法龍	単著	2008.10(平成20年10月)	『環』35	真言僧土宜法龍を近代日本仏教史の中に位置づける試み	18頁

56. 明治インド留学生たちが見た「比叡」と「金剛」の航海	単著	2009.2(平成21年2月)	『アジア文化研究所研究年報』43	「比叡」と「金剛」に便乗してイスタンブールまで行ったセイロン留学生小泉了諦と善連法彦の記録から見た両艦の航海の様態。	17頁
57. 土宜法龍とシカゴ万国宗教会議	単著	2009.3(平成21年3月)	松居竜五編『南方熊楠と仏教【報告集】』龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター	1893年のシカゴ万国宗教会議への土宜法龍の参加の経緯と会議における彼の発言を諸資料に跡付け、その意義を考察する。	pp. 50-57
58. The Tibet Fever among Japanese Buddhists of the Meiji Era	単著	2008(平成20年)	Esposito, Monica ed., Image of Tibet in the 19th and 20th Centuries, Vol. I, Ecole française d'Extrême-Orient.	河口慧海のチベット旅行への日本社会の反響、彼の報告が日本人のチベット・イメージの形成に決定的な影響を与えた経緯、およびその後の日本とチベットの関係史の考察。	21頁
59. 梵語・チベット語学生としての能海寛	単著	2009.5(平成21年5月)	『能海寛著作集』第6巻、U S S 出版	能海寛が遺したノートの分析に基づいて、彼がどのように梵語・チベット語を学習したかを明らかにする。	24頁
60. 南方熊楠と十九世紀ヨーロッパのインド学	単著	2011.8(平成23年8月)	田村義也・松居竜五編『南方熊楠とアジア』勉誠出版	南方熊楠がアメリカ・イギリスで過ごした19世紀末は西洋インド学の黄金時代であった。熊楠のインド学・インド学者との関わりと、この分野での彼の学習の軌跡をたどる。	pp. 135-144
61. 青木文教と河口慧海—「西藏大蔵経問題」	単著	2011.10(平成23年10月)	白須浄真編『大谷探検隊と国際政治社会—チベット・探検隊・辛亥革命』勉誠出版	青木文教と河口慧海の間に惹起したいわゆる「西藏大蔵経問題」を諸資料に跡付け、その原因、経過、背景について解明を試みる。	pp. 129-159
62. 河口慧海日記・蔵蒙旅日記(寺本婉雅)	単著	2012.1(平成24年1月)	武内房司編『日記に読む近代日本5 アジアと日本』吉川弘文館	河口慧海と寺本婉雅の旅行日記を取り上げ、彼らの旅行過程やその時代背景などを考察する。	pp. 134-161
63. 南方熊楠における死生観と超越	単著	2013.3	高田良信編『宗教における死生観と超越』方丈堂出版	土宜法龍、妻木直良を相手とする南方熊楠の生死と超越に関する語りについて考察する。	pp. 146-167
64. 河口慧海の手紙—肥下徳十郎他宛一	単著	2014.3	『堺研究』第36号	肥下家から発見された河口慧海の肥下徳十郎他宛の手・弔文等を翻刻・校訂し、解題を付して刊行したものの。	pp. 1-54
65. 善連法彦と『土耳其行紀事』	単著	2015.2	『アジア文化研究所研究年報』第49号	印度留学に出発するまでの善連の経歴を述べた上で、彼の手記『土耳其行紀事』のイスタンブール滞在中の記録を部分的に翻刻して提示する。	pp. (222)-(238)
66. 中国浙江省発現的兩種梵文貝葉写本	単著	2015	呂建福主編『密教文献整理与研究』中国社会科学出版社	中国浙江省から発現した2種の梵文貝葉写本は中国にある梵文写本としてつとに注目を集めてきたものである。本論文はその研究史をまとめながら、密教文献を主とするその内容を明らかにする。	pp. 231-240
67. 日本人とチベット—河口慧海のチベット旅行を中心として—	単著	2015	『ヒマラヤ学誌』No. 16	河口慧海を宗教家、旅行者、学者の三面から捉え、インド・ネパール・チベット旅行の概要を述べる。附録として河口半瑞宛河口慧海書簡を掲載。	pp. 234-244
68. 明治印度留学生—その南アジア体験をめぐって—	単著	2016.3	『印度學仏教學研究』64(2)	明治印度留学生(1886-1915)を一覧し、その動向を概観した後、目的、就学上の困難等をまとめ、最後に明治の印度留学の意義を明らかにする。	pp. (1)-(7)
69. 積興然のセイロン留学と積雲照—林董関係書簡を中心に—	単著	2016.3	『密教研究』48	積興然のセイロン留学の過程を林董関係資料である「南條文雄宛E.R.グネラトネ書簡」と「積雲照大和上書簡集」を資料にして明らかにする。	pp. 53-65

70. 明治印度留学生東温謙の生活と意見、そしてその死	単著	2016. 3	大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』勉誠出版	印度留学生東温謙に見る印度留学体験の分析。	pp. 29-42
71. 大宮孝潤のインド	単著	2016. 4	悉曇蔵研究会監修・編集『梵字悉曇教本』上巻、U S S 出版	天台宗における梵字悉曇の伝統の復興者として知られる大宮孝潤のインド留学を追跡し、その意義を分析したものの。	pp. 338-368
72. インド中期密教 注釈者と注釈書 プツダグフヤ、アーナンダガルバ、シャークヤミトラ	単著	2016. 9	高橋尚夫・野口圭也・大塚伸夫編『空海とインド中期密教』春秋社	瑜伽タントラの三大学匠とされるプツダグフヤ、アーナンダガルバ、シャークヤミトラの伝記と相承系譜をチベット史料から明らかにする。	pp. 45-57
73. 明治印度留学生の行動と思索—小泉了諦と善連法彦の体験—	単著	2016. 12	『印度學仏教學研究』65 (1)	1890年から翌年にかけて敢行された真宗僧侶の小泉了諦と善連法彦のトルコ・欧州行を取り上げ、その行動と思索の跡を辿り、体験の意味を分析する。	pp. (1)-(8)
74. 善連法彦の『英仏行』	単著	2017. 2	『(東洋大学) アジア文化研究所研究年報』51	善連法彦が書き残した英文日記『英仏行』の和訳を通じて、小泉了諦と善連の欧州旅行の実態を明らかにする。	pp. (350)-(364)
(その他)					
1. 慧海の旅—『河口慧海請来チベット資料図録』刊行によせて—	単著	1987. 2(昭和62年2月)	河北新報(2月12日付)	東北大学所蔵の「河口コレクション」の紹介。	新聞記事
2. チベット文化(1)~(7)	単著	1987. 4~6(昭和62年4月~6月)	河北新報連載記事	チベット文化についての紙上講座。	新聞記事
3. チベット小事典	単著	1988. 2(昭和63年2月)	松本栄一『極限の高地・チベット世界』小学館	チベット文化百般について幅広く説明解説した。	12頁
4. 転生のひと・法王ダライ・ラマ	単著	1990. 3(平成2年3月)	『大法輪』平成2年4月号	ダライ・ラマとはどのような存在かを論ずる。	5頁
5. 1989年の歴史学会—回顧と展望—内陸アジア(チベット)	単著	1990. 5(平成2年5月)	『史学雑誌』99-5	1898年の内陸アジア(チベット)関係の国内の研究の回顧と展望	16頁
6. チベット語	単著	1990. 8(平成2年8月)	『インド通信』	チベット語の紹介。	2頁
7. 田中公明著『詳解河ロコレクション—チベット・ネパールの仏教美術』	単著	1991. 1(平成3年1月)	『日本ネパール協会会報』104	書評	1頁
8. デトレフ・インゴ・ラオフ著『ボン教の死者の書』	単著	1994. 12(平成6年12月)	『ユリイカ』26-13	翻訳・解説	12頁
9. 田中公明著『チベット密教』	単著	1995. 3(平成7年3月)	『密教学研究』27	書評	4頁
10. 密教の文化	単著	1995. 11(平成7年11月)	松長有慶編『密教を知るためのブックガイド』法蔵館	密教文化の諸相に関わるブックガイド	10頁

11. 田中公明著『インド・チベット曼荼羅の研究』	単著	1996.12(平成8年12月)	『東方』第12号	書評	2頁
12. 高楠順次郎と河口慧海一脱垂と入垂の仏教学	単著	1999.8(平成11年8月)	『大法輪』平成11年9月号	欧化された仏教学の流れとは別に「入垂の仏教学」が存在し得た可能性を探る。	6頁
13. 秘境ムスタン チベット文化のタイムカプセル	単著	1999.8	読売新聞夕刊	ムスタンの紹介を兼ねて、仏教文化の保存の必要を訴える。	新聞記事
14. パドマサンバヴァ・ロードを行く	単著	2000.11(平成12年11月)	『大法輪』平成12年11月号	ムスタン紀行	6頁
15. いかにして生死を越えるか—戦争と仏教—	単著	2001.3(平成13年3月)	『生と死』第4号	河口慧海の『生死自在』などを材料に、日本仏教が戦争と如何に関わってきたかの問題を考える。	11頁
16. ツルティム・ケサン、山田哲也共訳『チベットの密教ヨーガ』	単著	2001.3(平成13年3月)	『密教学研究』33	書評	4頁
17. 菩提樹の葉陰の静けさ	単著	2001.10(平成13年10月)	読売新聞夕刊平成13年10月〇日	研究ノートのエッセイ。	新聞記事
18. 『秘境西域八年の潜行抄』解説	単著	2001.10(平成13年10月)	西川一三『秘境西域八年の潜行抄』中公文庫	同書に対する解説。	6頁
19. 河口慧海と在家仏教運動	単著	2002.4(平成14年4月)	『大法輪』平成14年4月号	近代の仏教運動のシリーズの一つとして河口慧海の在家仏教運動を取り上げる。	4頁
20. 日本から世界へ 哲学館初期の学生たち	単著	2002.4(平成14年4月)	『東洋大学井上円了記念学術センターサティア』46	善連法彦と大宮孝潤の埋もれた事績を発掘し、顕彰する。	3頁
21. ムスタンの荒野に咲く野生の白バラ	単著	2002.3(平成14年3月)	『日本ネパール協会会報』No.171	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシリーズ「写真を語る」①	1頁
22. カグベニの眺め	単著	2002.5(平成14年5月)	『日本ネパール協会会報』No.172	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシリーズ「写真を語る」②	1頁
23. タシーテンジン師	単著	2002.9(平成14年9月)	『日本ネパール協会会報』No.174	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシリーズ「写真を語る」③	1頁
24. 『展望 河口慧海論』高山龍三・著	単著	2003.3(平成15年3月)	『日本ネパール協会会報』No.177	書評	1頁
25. 子山羊を抱いた少女	単著	2003.5(平成15年5月)	『日本ネパール協会会報』No.178	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシリーズ「写真を語る」④	1頁
26. 友だちといっしょ	単著	2003.7(平成15年7月)	『日本ネパール協会会報』No.178	松井亮氏撮影の写真に添えた文章のシリーズ「写真を語る」⑤	1頁
27. 松井亮さんの急逝を悼む	単著	2003.7(平成15年7月)	『日本ネパール協会会報』No.179	2003年6月にカトマンドゥで急逝した松井亮さんに対する追悼文	4分の1頁
28. 高山龍三編著『展望 河口 慧海論』	単著	2003.9(平成15年9月)	『學燈』Vol.100 No.9	書評を兼ねたエッセイ	4頁
29. 河口慧海 禁食肉・禁酒の慧海は美食家で健啖家だった	単著	2003.10(平成15年10月)	『別冊太陽125 日本の探検家たち』平凡社	河口慧海のエピソードと人となり	4頁

30. 高野山と河口慧海	単著	2004.1(平成16年1月)	高野山時報	高野山と河口慧海との関わり		2頁
31. チベットの密教と文化	単著	2004.3(平成16年3月)	高野山大学通信教育室	通信制大学院の教科書として執筆したチベット密教文化概説		203頁
32. 密教史概説の手引き	共著	2004.3(平成16年3月)	高野山大学通信教育室	通信制大学院の教科書として執筆したチベット密教史概説(担当は第1章インド密教史、第2章チベット密教史)	武内孝善・奥山直司、佐藤正信	24頁
33. 河口慧海とはどんな人?、河口コレクション	単著	2004.5(平成16年5月)	『週刊朝日百科仏教を歩く』28	河口慧海の生涯とその志について解説。山折哲雄・末木文美士編『名僧たちの教え』朝日新聞社、2005年に再録。		6頁
34. インド国シッキム州十日間の旅・報告その1～4	単著	2004.8-9(平成16年8-9月)	高野山時報	シッキムの仏教概説と旅行の一部始終		12頁
35. 現代青海事情	単著	2005.8-9(平成17年1月)	高野山時報	中国青海省の現代事情		2頁
36. 河口慧海の日記 克明な記述 謎の越境ルート解明へ	単著	2005.1(平成17年1月)	読売新聞夕刊	河口慧海の日記の発見とその意義		新聞記事
37. チベットの仏教、菩提	単著	2005.3(平成17年3月)	三木紀人・山形孝雄編『宗教のキーワード集』学燈社	キーワード(菩提)解説とコラム「世界のさまざまな宗教:(チベットの仏教)を執筆した。		4頁
38. 河口慧海の日記発見	単著	2005.4(平成17年4月)	ナショナルジオグラフィック・日本版	河口慧海の日記の発見報告と予想される旅行ルートの考察		4頁
39. 河口慧海の道を追う一日本人初のヒマラヤ越え	単著	2006.4(平成18年4月)	日本山岳会関西支部報No.122	日記に基づいて河口慧海のヒマラヤ踏査経路を探る。		11頁
40. 慧海、三つの顔	単著	2007.1(平成19年1月)	『季刊民俗学119 河口慧海の道』千里文化財団	探検旅行者、学者、宗教家の3つの顔が慧海という一つの人格の中でどう結びついてきたかを考える。		3頁
41. 河口慧海とその時代	単著	2007.3(平成19年3月)	『フォーラム堺学』第13集	堺における河口慧海とそのヒマラヤ越えを中心とする第1回旅行についての解説		48頁
42. 日本仏教界の入蔵熱	単著	2007.3(平成19年3月)	『共生する世界 仏教と環境』法蔵館	明治の日本仏教界に起こった入蔵熱についての解説		12頁
43. 変わりゆく世界仏教地図と真言宗徒	単著	2008.1(平成20年1月)	『へんじょう』22	アジア各地におこっている仏教の新しい潮流とグローバル化時代の真言宗徒の役割を語る。		2頁
44. ジャガダラで発見された五祀堂型寺院の最古の遺構	単著	2009.2(平成21年2月)	『高野山大学密教文化研究所紀要』第22号	モシャラフ・ホセイン氏の英語論文の翻訳と解説		10頁
45. 河口慧海の歩いた道一ヒマラヤ・チベット・日本一	単著	2009.3(平成21年3月)	『フォーラム堺学』第15集	河口慧海の事績をチベット旅行を中心に紹介する。		43頁
46. 川喜田二郎氏を悼む	単著	2009.7(平成21年7月)	読売新聞朝刊	川喜田二郎氏の追悼文		新聞記事
47. 南方熊楠と高野山、そして真言密教	単著	2009.10(平成21年10月)	『熊楠Works』No.34	南方熊楠と高野山、及び真言密教の関係を考察した講演録		pp.12-19
48. 河口慧海 志を胸にチベット入境を果たした探検僧	単著	2010.2(平成22年2月)	『歴史読本』2月号	河口慧海の事績をチベット旅行を中心に紹介・解説する。		6頁



49. 熊楠一法龍、二十九年 の交流	単著	2010.3(平成22 年3月)	『機』No.216	南方熊楠と土宜法龍の書簡を通じての 交流に関する解説	pp. 6-9
50. 熊楠vs. 法龍—往復書簡 研究の一面—	単著	2010.4(平成22 年4月)	『熊楠Works』No. 35	梶尾山高山寺発現の新資料を用いた往 復書簡の紹介と新たな研究の可能性に ついての論及	pp. 18-22
51. チベットの探検	単著	2010.4	『新アジア仏教史09 チベット 須弥山の 仏教世界』佼成出版 社	外国人によるチベット探検史の概観	pp. 262-265
52. 新発見の「南方熊楠書 翰」刊行へ	単著	2010.5(平成22年5月)	『中外日報』2010年5 月11日	藤原書店から刊行された高山寺蔵南方 熊楠書翰の特徴と意義	新聞記事
53. 南方熊楠と大乘仏教 (上) 真言宗・土宜法龍と の交流を巡って	単著	2010.6	『大法輪』77-6	南方熊楠の仏教に対する態度、法龍と の交流と曼荼羅の学習について	pp. 132-139
54. 「日本のチベット」考	単著	2010.6	下西忠・山口幸照・ 小笠原正仁編『仏教 と差別 佐々木兼俊 が歩んだ道』明石書 房	日本独特の「〇〇のチベット」という 差別表現の意味と由来を考察する。	17頁
55. 南方熊楠と大乘仏教 (下) 「熊楠の生命の樹」 から「南方曼陀羅」へ	単著	2010.8(平成22 年8月)	『大法輪』77-8	南方熊楠はどのようなプロセスを経て 「南方曼陀羅」を構想するに至ったか を考察する。	pp. 180-188
56. 『正真仏教』解説	単著	2010.8(平成22 年8月)	河口慧海『正真仏 教』慧文社	河口慧海の代表的著作である『正真仏 教』の解説	6頁
57. Correspondence between Kumagusu and Dogi Horyu: On the Newly Found Letters from Kumagusu to Dogi	単著	2010(平成22 年)	Center for the Study of Japanese Religions Newsletter Autumn 2010 Issue 20-21	南方熊楠と土宜法龍との書簡による交 流を高山寺書簡に基づいて叙述する。 この文章は、松居竜五編『南方熊楠と ロンドン Minakata Kumagusu and London』(科学研究費補助金基盤研究 B)にも再録された。	pp. 20-23
58. 書籍紹介：隅田正三『改 訂版 求道の師 能海寛』 U S S出版	単著	2010.10(平成 22年10月)	山陰中央新報	能海寛の研究書の紹介	新聞記事
59. 明治仏教と神智学との出 会い(多重化する近代仏教 ④)	単著	2011.2(平成23 年2月)	『春秋』2011.2.3	明治22年のオルコットとダルマパーラ の来日によって本格化する神智協会と 日本仏教界との交流の端緒が、フェノ ロサ、ビゲローと赤松連城との出会い にあったことを明らかにする。	pp. 23-26
60. 青海地方とチベット仏教	単著	2011.3(平成23 年3月)	奥宮清人編『生老病 死のエコロジー』昭 和堂	チベット民族の歴史的ダイナミズムと チベット史における青海地方の位置づ けの考察。	pp. 199- 203
61. 書籍紹介：南方熊楠顕 彰会『歩み—南方熊楠賞の 20年と顕彰事業の足跡』	単著	2011.10(平成 23年10月)	『熊楠Works』No. 38	書籍紹介	p. 50
62. 南方熊楠大事典項目執 筆「仏教」「高野山登山」 「真言宗高等中学林への招 聘」	単著	2012.1(平成24 年1月)	松居竜五・田村義也 編『南方熊楠大事 典』勉誠出版社。	南方熊楠の仏教観・仏教思想の展開を 「仏教」に、熊楠と高野山との関わり を「高野山登山」に、土宜法龍による 熊楠への学校招聘を「真言宗高等中学 林への招聘」にまとめた。	pp. 26- 33, 193- 195, 254- 257
63. 盟友・土宜法龍との往 復書簡より	単著	2012.2(平成24 年2月)	『別冊太陽192 南方 熊楠 森羅万象に挑 んだ巨人』平凡社	いわゆる「那智隠栖期」の南方熊楠と 土宜法龍の書簡を通じての交流が熊楠 の靈魂論を進ませた経緯について述べ たもの。	pp. 104- 105
64. 東西思想への視座—土 宜法龍への書簡を中心に—	単著	2012.3(平成24 年3月)	『季刊民俗学139 特 集南方熊楠と民俗 学』千里文化財団	南方熊楠が東西の文化・思想の比較に 可能性を見出した端緒をロンドン時代 の書簡、日記、論考の中に探ったも の。	pp. 25-28
65. 第8回南方熊楠ゼミナ ール 南方マンダラはどこまで 曼荼羅か：「南方熊楠と 仏教」研究の現在	単著	2012.4(平成24 年4月)	『熊楠Works』No. 39	いわゆる「南方マンダラ」は真言密教 の曼荼羅とどこが同じでどこが違っ ているのか。熊楠の思想の核心と考え られている南方マンダラに研究の現状 を踏まえて考察を加える。	pp. 14-17

66. チベット仏教とは何か？	単著	2012.12 (平成24年12月)	『ダライ・ラマと日本人』徳間書店	「チベット仏教の特徴」「日本仏教との比較で見るチベット仏教」「チベットの僧侶と尊格」「チベット仏教4つの教団」「日本仏教とチベット仏教の交流史」の5つの観点からチベット仏教を総合的に解説。	pp. 47-62
67. 河口慧海と南方熊楠	単著	2013.4 (平成25年4月)	『熊楠Works』No. 41	シリーズ「南方熊楠の同級生たち」の一環としての両者の比較	p. 39
68. 河口慧海 漂泊の思いに動かされた人	単著	2013.7 (平成25年7月)	『怪』第39号	河口慧海の旅の味わい。第1回チベット旅行におけるマーサナローワル湖への到着など。	pp. 234-235
69. 書評：白須浄真『大谷探検隊研究の新たな地平—アジア広域調査活動と外務省外交記録』	単著	2013.8 (平成25年8月)	『書論』第39号	左記の書に対する書評。	pp. 209-210
70. 河口慧海とはどんな人？大蔵経を求め仏教再生を願った改革者・名僧の遺産 河コレクション	単著	2013.8 (平成25年8月)	週刊朝日百科 仏教を歩く改訂版 大谷光瑞 河口慧海	河口慧海の生涯と思想の解説、並びに河コレクションの紹介	pp. 12-15, 18-19
71. 新刊紹介 融道男著『祖父融道玄の生涯』	単著	2014.2 (平成26年2月)	『高野山時報』平成26年2月21日	先の書に対する書評兼紹介	p. 16
72. 河口慧海を支えた人々—堺の篤志家・肥下徳十郎を中心に—	単著	2014.3	『フォーラム堺学』第20集	新発見の肥下家資料を中心に、河口慧海と彼を支えた肥下徳十郎を始めとする堺・大阪の支援者グループとの関係を論ずるもの	pp. 5-36
73. ダライ・ラマ十三世と日本人	単著	2014.11	『春秋』2014年11月号 (No. 563)	ダライ・ラマ13世時代のチベットと日本の交流を述べたもの。	pp. 5-7
74. 高本康子『ラサ憧憬—青木文教とチベット』	単著	2015.9	『近代仏教』22	書評。	pp. 63-66
75. 松居竜五『南方熊楠—複眼の学問構想』	単著	2017.3	『熊楠研究』11	書評。	pp. 195-201

所属	文学部	職名	教授	氏名	奥山直司	大学院の授業担当の有無 ( 有 )
教育活動						
教育上の主な業績		年月日	概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		2002. 5. 15 (平成14年5月15日)	ネパール・ヒマラヤで撮影したチベット仏教文化関係の写真をデジタル化し、Power pointを用いて臨場感のある授業が展開できるようにした。			
2. 作成した教科書、 教材、参考書		1995. 11. 20 (平成7年11月20日) 1996. 4. 8 (平成8年4月8日) 1996. 6. 10 (平成8年6月10日) 1998. 4. 27 (平成10年4月27日) 2002. 4. 20 (平成14年4月20日) 2003. 8. 10 (平成15年8月10日) 2004. 7 (平成16年7月)	「密教の文化」(『密教を知るためのブックガイド』所収) 『釈尊絵伝』 『チベット [マンダラの国]』 スネルグローブ/リチャードソン共著『チベット文化史』 翻訳・解説 ネパールのムスタンで撮影されたマンダラ等の写真を提供して Gigaviewを用いた教材作成に協力した 『評伝 河口慧海』中央公論新社 平成16年度より大学院で教材として使用。 著書『ムスタン 曼荼羅の旅』をデイジーコンサルティング(有) と協力してマルチメディア版DAISY図書として出版			
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等		2013. 10. 24 2014. 8, 29	フォーラム堺学講演「河口慧海を支えた人々ー堺の篤志家・肥下徳十郎を中心に」 全国済生会病院長会講演「高野山と曼荼羅」			
4. その他教育活動上 特記すべき事項						